

PUB-NO: JP02000079158A
DOCUMENT-IDENTIFIER: JP 2000079158 A
TITLE: DEODORANT

PUBN-DATE: March 21, 2000

INVENTOR-INFORMATION:

NAME	COUNTRY
AOKI, KAZUO	
AOKI, YASUE	
INT-CL (IPC): A61L 9/01; A61K 7/32	

ABSTRACT:

PROBLEM TO BE SOLVED: To efficiently deodorize a bad smell of a food, bad breath, body odor or the like even if used at a low concentration and obtain a safe deodorant by including a fruit juice of Japanese persimmon, its solid material or a fruit extract of Japanese persimmon and an water-soluble extract of green tea as active ingredients.

SOLUTION: This deodorant is composed by including a fruit juice of Japanese persimmon, its solid material or a fruit extract of Japanese persimmon and a water-soluble extract of green tea as active ingredients. In the occasion, a juice or squeezed juice of Japanese persimmon or its concentrated liquid can be used as the fruit juice of the Japanese persimmon and so forth. Desirably, a fruit juice of an un-ripe persimmon or an astringent persimmon and so forth can be used as the fruit juice of the Japanese persimmon. On the other hand, a solid or liquid of a water-soluble extract of green tea leaves, its dried material and processed matter with steam or being roasted can be used as the water-soluble extract of green tea. By using a combination of the extract of Japanese persimmon and the extract of green tea, a deodorizing effect can be enhanced and each characteristic smell or fermentation smell can be controlled even if used at a low concentration.

COPYRIGHT: (C)2000,JP0

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号
特開2000-79158
(P2000-79158A)

(43) 公開日 平成12年3月21日 (2000.3.21)

(51) Int.Cl. ⁷	識別記号	F I	テマコード* (参考)
A 6 1 L 9/01		A 6 1 L 9/01	R 4 C 0 8 0
A 6 1 K 7/32		A 6 1 K 7/32	4 C 0 8 3

審査請求 未請求 請求項の数 2 F D (全 5 頁)

(21) 出願番号	特願平10-267265	(71) 出願人	598129059 青木 一男 兵庫県西宮市学文殿町 1 丁目 7 - 22 エト ワール学文殿 B-101
(22) 出願日	平成10年9月4日 (1998.9.4)	(71) 出願人	392035938 青木 ヤスエ 西宮市安井町 4 - 25 - 103
		(72) 発明者	青木 一男 兵庫県西宮市学文殿町 1 丁目 7 - 22 エト ワール学文殿 B-101
		(74) 代理人	100095522 弁理士 高良 尚志

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 消臭剤

(57) 【要約】

【課題】 低濃度であっても食品、口臭、体臭、その他の悪臭等を効果的に消臭若しくは脱臭することができる安全性に優れる。

【解決手段】 柿果実液若しくはその固形化物又は柿果実抽出物と、緑茶の水溶性抽出物とを有効成分として含有する。

【特許請求の範囲】

【請求項1】柿果実液若しくはその固形化物又は柿果実抽出物と、緑茶の水溶性抽出物とを有効成分として含有することを特徴とする消臭剤。

【請求項2】柿果実液若しくはその固形化物又は柿果実抽出物が、未熟柿又は渋柿の果実液若しくはその固形化物又は果実抽出物である請求項1記載の消臭剤。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、消臭又脱臭性を有する消臭剤に関する。

【0002】

【従来の技術及び発明が解決しようとする課題】柿抽出液、緑茶抽出液等が、それぞれ消臭効果を有していることは既知である。これらの消臭メカニズムは、柿抽出液、緑茶抽出液等の中に存在するポリフェノール類、タンニン類が悪臭物質と中和、酸化・還元、包接反応することにより消臭効果を発揮することが想定された。

【0003】しかし、柿抽出液、緑茶抽出液等には、独特の色、におい（発酵臭等）及び重合反応による沈殿などの問題があるため、高濃度に製品に配合できず、制限があった。そこで、これらの欠点を解消するために、できるだけ低濃度で配合しても有効な、より強力な消臭剤が要請されている。

【0004】本発明は、従来技術に存した上記のような問題点を鑑み行われたものであって、その目的とするところは、低濃度であっても食品、口臭、体臭、その他の悪臭等を効果的に消臭若しくは脱臭することができる安全性に優れた消臭剤を提供することにある。

【0005】

【課題を解決するための手段】本発明の消臭剤は、柿果実液若しくはその固形化物又は柿果実抽出物と、緑茶の水溶性抽出物とを有効成分として含有することを特徴とする（請求項1）。

【0006】本発明の消臭剤は、例えば、生理的に無害な賦形剤を含むものであってもよく、柿果実液若しくはその固形化物又は柿果実抽出物と緑茶の水溶性抽出物が生理的に無害の担体に担持されてなるものとすることもできる。

【0007】柿果実液若しくはその固形化物又は柿果実抽出物としては、柿果実の搾汁若しくは果汁、その濃縮液若しくは固形化物、又は固体若しくは液体の抽出物を用いることができる。

【0008】柿果実液若しくはその固形化物又は柿果実抽出物は、未熟柿又は渋柿の果実液若しくはその固形化物又は果実抽出物であることが望ましい（請求項2）。

【0009】緑茶の水溶性抽出物としては、茶の葉、或いはその乾燥物又は蒸気若しくは焙煎等により加熱処理されたものの、固体若しくは液体の水溶性抽出物を用いることができる。

【0010】柿果実液若しくはその固形化物又は柿果実抽出物は、例えば、未熟柿または渋柿の搾汁の自然発酵により糖分を除去したものを減圧下脱水濃縮することにより得ることができる。

【0011】緑茶の水溶性抽出物は、例えば、乾燥したチャノキ[*Thea sinensis* L.(Theaceae)]の葉から水溶性成分を抽出できる条件下で抽出することにより得られる。より具体的には、例えば、エタノール、グリセリンなどの水性溶媒が溶解した水溶液を用いて、加温下（約60℃）で乾燥したチャノキの葉から抽出した抽出物を、減圧下脱水濃縮することにより得ることができる。

【0012】本発明の消臭剤は、柿果実液又は液体の柿果実抽出物、及び、緑茶の液体の水溶性抽出物を脱水濃縮したものや粉末化したものを混合して製造することもでき、濃縮前又は脱水濃縮過程において混合した後に脱水濃縮することにより調製することもできる。

【0013】柿果実液若しくはその固形化物又は柿果実抽出物と、緑茶の水溶性抽出物の比率は、例えば、緑茶の水溶性抽出物1重量部（固形分として）に対して柿果実液若しくはその固形化物又は柿果実抽出物1乃至10重量部（固形分として）とすることができるが、これに限らない。両者は均一に混合された状態で存在することが好ましい。

【0014】本発明の消臭剤においては、柿果実液若しくはその固形化物又は柿果実抽出物と、緑茶の水溶性抽出物を組み合わせることにより、柿抽出液又は緑茶抽出液単独の場合に比し飛躍的に消臭若しくは脱臭効果が増強されると共に、柿及び緑茶それぞれの特有の臭いや発酵臭等が、組み合わせた両者の相互作用により効果的に抑えられる。

【0015】その理由は不明であるが、おそらく柿中に含まれる縮合型タンニン、緑茶中に含まれるカテキン、加水分解型タンニン等が相互に作用し合い、それぞれの短所を補いつつ相乗効果を示すためであると考えられる。更に柿に含まれるピロガロール、緑茶中に含まれるカテキン等は抗菌作用を示すので、微生物（細菌、真菌など）による二次汚染を原因とする腐敗臭等にも効果的であると考えられる。

【0016】

【発明の効果】本発明の消臭剤は、柿抽出液又は緑茶抽出液単独の場合に比し極めて消臭若しくは脱臭効果が高く、低濃度であっても食品、口臭、体臭、その他の悪臭等を効果的に消臭若しくは脱臭することができ、然も柿及び緑茶それぞれの特有の臭いや発酵臭等は効果的に抑えられる。

【0017】

【実施例】未熟柿800gを小細片としたものと乾燥させたチャノキの葉（緑茶）200gを細切したものを、1%グリセリン水溶液1000g中に50℃で24時間浸して果肉及び葉内組織物の成分を溶出させた後、それ

を濾過して固形分を除去し、更に、6か月間密封保存して発酵により糖分を除去した。その後、減圧下脱水して濃縮エキス液300gを得た。また、同様に減圧下で脱水して濃縮粉末60gを得た。

【0018】比較のため未熟柿800gのみ、及びチャノキの葉（緑茶）200gのみをそれぞれ同様に処理してそれぞれの抽出液を調製した。

【0019】次に消臭力試験の結果を示す。

試験例1

上記本発明の消臭剤としての濃縮エキス液3重量%含有した水溶液1gを三角フラスコに注入した。上記本発明の濃縮エキス液を1重量%含有した水溶液、上記柿抽出液を5重量%含有した水溶液、上記緑茶抽出液を5重量%含有した水溶液についても、それぞれ1gを、別々の*

*三角フラスコに注入した。

【0020】次いで、これら4本の三角フラスコ内にそれぞれアンモニア（750ppm）500mlを注入して密封した。

【0021】トリメチルアミン（80ppm）、イソ吉草酸（40ppm）、硫化水素（100ppm）、及びメルカプタン（60ppm）についても、同様に三角フラスコ内に密封した。

【0022】30分後に、北川式検知管法によりアンモニア、トリメチルアミン、イソ吉草酸、硫化水素、及びメルカプタンの残存量を測定し、それぞれの消臭率を産出した。結果を表1乃至表3に示す。

【0023】

【表1】

悪臭物質（初期濃度）	アンモニア (750ppm)	トリメチルアミン (80ppm)
3重量%本発明消臭剤の消臭率	100%	100%
1重量%本発明消臭剤の消臭率	100%	98%
5重量%柿抽出液の消臭率	55%	45%
5重量%緑茶抽出液の消臭率	15%	10%

【0024】

※ ※【表2】

硫黄系悪臭物質

悪臭物質（初期濃度）	メルカプタン (60ppm)	硫化水素 (100ppm)
3重量%本発明消臭剤の消臭率	100%	100%
1重量%本発明消臭剤の消臭率	90%	100%
5重量%柿抽出液の消臭率	25%	58%
5重量%緑茶抽出液の消臭率	0%	20%

【0025】

★40★【表3】

その他の悪臭物質

悪臭物質（初期濃度）	イソ吉草酸（40ppm）
3重量％本発明消臭剤の消臭率	100％
1重量％本発明消臭剤の消臭率	100％
5重量％柿抽出液の消臭率	75％
5重量％緑茶抽出液の消臭率	20％

表1乃至表3に示されるように、柿抽出液、緑茶抽出液単独では消臭効果は比較的緩やかであるが、本発明の消臭剤の場合は、それらに比し顕著に優れた消臭効果を示す。然も、1重量％本発明消臭剤の消臭率が5重量％柿抽出液の消臭率と5重量％緑茶抽出液の消臭率の和より優れていることから、本発明の消臭剤において相乗的効果を奏することがわかる。

試験例2

被験者群A（5名、男性3名、女性2名）には、上記本発明の消臭剤としての濃縮エキスを1重量％配合したニンニクエキスを、被験者群B（5名、男性3名、女性2名）には、柿抽出液及び緑茶抽出液をそれぞれ5重量％配合したニンニクエキスを、対照群（5名、男性3名、女性2名）には、ニンニクエキスのみを、それぞれ飲ませ、15時間後、消臭の度合いを6名のパネラーに*

臭気判定結果

パネラー番号	被験者群A (5名の平均値)	被験者群B (5名の平均値)	対照群 (5名の平均値)
No.1	0	1.2	4.8
No.2	0.2	2.8	4.2
No.3	0	1.8	5.0
No.4	0.1	2.5	4.6
No.5	0	1.8	4.0
No.6	0	3.4	5.0

この官能試験の結果は、本発明の消臭剤が、低濃度においても、従来消臭が困難とされていたニンニク臭をほぼ完全に消臭できることを示す。

【0028】本発明の消臭剤を配合することにより、効果に持続性のある消臭製品を提供することができる。以下にその例を挙げるが、勿論本発明はこれらに限定されるものではない。

実施例1 消臭顆粒剤

*より次の6段階で判定させた。なおニンニクエキスは、ニンニク0.3gを水100mlに懸濁させたものを用いた。結果を表4に示す。

【0026】

0・・・無臭

1・・・無臭ではないがニンニク臭は識別できない

2・・・僅かにニンニク臭を識別できる

3・・・軽度乃至中程度のニンニク臭がする

4・・・強いニンニク臭がする

5・・・強烈なニンニク臭がする

【0027】

【表4】

※上記本発明の消臭剤としての濃縮粉末 3.0重量％

フマル酸ナトリウム 5.0重量％

オレンジファイバー 3.0重量％

ソルビトール 20.0重量％

デキストリン 68.9重量％

香料 0.1重量％

上記配合物に適宜量の水を加えて常法により顆粒剤とした。

【0029】本製品は、例えば口臭や便臭を抑えるために用いることができる。

実施例2 消臭ローション

上記本発明の消臭剤としての濃縮エキス液 5.0重量%

1,3-ブチレングリコール 2.0重量%

エタノール 10.0重量%

ヤグルマギクエキス 0.5重量%

メチルパラベン 0.1重量%

精製水 82.4重量%

本ローションは、例えば汗やその他による体臭やタバコ臭を抑えるために用いることができる。

フロントページの続き

(72)発明者 青木 ヤスエ
兵庫県西宮市安井町4-25-103

Fターム(参考) 4C080 AA03 AA06 BB02 BB04 CC02
CC04 CC05 CC08 CC09 CC12
HH03 HH05 JJ01 JJ04 KK06
MM31 QQ03
4C083 AA111 AA112 AC102 AC122
AC132 AC292 AC482 AD242
CC04 CC17 DD16 DD27 EE18
EE34